

《Ⅰ. 研究報告》

助成年度 Grant Year	2 0 2 3
研究テーマ Research Title	福祉介護用具・家具の外観的特徴に感じる心理的抵抗の実態調査
研究代表者 Representative	山田泰之
代表者所属機関 Organization	法政大学デザイン工学部
職名・課程名 Position/Program	山田泰之

①研究概要

研究の背景、目的・リサーチクエスチョン、学術的重要性、対象について記述してください。

1 研究の背景

日本は世界で最も高齢化が進んでいる「超高齢社会」にあり、高齢者が自宅で安全かつ快適に生活できる環境整備が重要な課題となっています。しかし、介護施設の充実には限界があり、高齢者ができる限り自宅で自立した生活を続けられるよう支援することが求められています。そのため、福祉・介護用具や高齢者向け家具が有効な支援手段となりますが、これらの製品には外観や名称に対する心理的な抵抗があるケースが多く、導入が進まない問題が存在します。

現状、福祉・介護用具の多くは機能的な面でユーザーニーズを満たしていますが、意匠（デザイン）や外観、名称などの心理的な要素が十分に考慮されていない可能性があります。このような心理的障壁が高齢者の自発的な導入を妨げ、結果として高齢者の生活の質（QOL）の向上を阻害する要因となっていると考えられます。

2 目的・リサーチクエスチョン

本研究の目的は、高齢者やその家族が福祉・介護用具や家具を導入する際に感じる心理的抵抗の実態を明らかにすることです。特に、外観や名称など意匠的な特徴が高齢者の心理に与える影響を調査し、どのような要素が心理的な導入障壁となっているかを解明することを目指します。本研究では以下のリサーチクエスチョンを設定します。

1. 高齢者やその家族が福祉・介護用具の導入に抵抗を感じる具体的な理由は何か。
2. その心理的抵抗は外観やデザイン、名称などのどの要素に起因するのか。
3. 心理的抵抗を軽減し、導入を促進するために有効なデザインやネーミングの特徴とは何か。

3 学術的重要性

本研究は、福祉・介護用具や高齢者向け家具のデザインにおける新たな視点を提供します。これまで機能面が重視されてきた福祉・介護用具の分野において、外観的特徴が高齢者の心理に与える影響を明確化することで、より使いやすく、愛着を持てる製品開発に貢献することが期待されます。さらに、日本で得られた知見は、今後高齢化が進む他国においても有効な対応策の参考となり、国際的な社会福祉政策にも波及する可能性があります。

4 対象

本研究の対象は以下の通りです。

自宅で生活する 70 歳以上の高齢者およびその同居家族

東京都近郊の高齢者を対象に、生活環境の実態調査や福祉用具・家具の使用状況、導入時の選定理由や未導入の理由をヒアリングします。

老人ホーム等高齢者施設の職員

自宅調査が不十分な場合、老人ホームでの調査を補完的に実施し、高齢者が利用を嫌がる福祉用具や家具の特徴を把握します。

②研究の経過（研究課題Ⅰ）

研究課題Ⅰについて、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題Ⅰ：調査物品の具体的検討と試験調査

実施内容： 高齢化に伴う様々な身体の衰えから、一般的な成人向けの物品や家具での生活に不都合が出たり、安全ではなくなる。そのような場合、高齢者の身体的な特徴に対応した物品や家具が利用される。生活環境すべての用品を調査することは現実的ではないため、どの用品について、何を、どのように調査するかを事前検討した。また、その検討を踏まえて、数名の調査対象者に対して、試験的に調査して、期待する調査結果を得られるか確認した。

高齢者用家具や器具の調査

大手通販サイトの売れ行き（オススメ）に出る高齢者用の器具や家具として、杖、移動型手すり、椅子をそれぞれ複数種類購入して、実際に体験調査した。また高齢者用建築、老年学等に関する書籍や論文を調査した。この際の気付きについて3点紹介する。

1) 高齢者の生活を支援する家具の枠組みが曖昧

購入した高齢者用椅子、杖、手すり等を組み立てる際に、細かな部品があったり、小さい文字の説明書、そもそも説明書がないなど、完成品とするまでの工程が一般家具と大差ないものが多かった。つまり、高齢者が自身で購入して使うのではなく、子や孫が購入することを前提としている可能性がある。このようにそもそも高齢者を支援する家具という定義があいまいで、製品自体にも配慮がなされていないように感じた。おそらく業界として規格などが決まっていないことが要因と考えられる。

2) 粗悪品が多かった

粗悪品が多かった点である。一般的な家具よりも、比較的高額であるにも関わらずつくりが雑な背品が多かった。特に、手すりについては最も顕著で、指を怪我するようなさくれや突起など一般的な製品の品質とは考えられない部分が多かった。また、手すりであるにも関わらず水平がとれていないものなどもあった。

3) 人間工学的な根拠のある物品がほぼ見当たらなかった。

これらの高齢者用家具の調査や購入による体験を通して分かったことは、それらの機能（サイズや構造）に統一性が無い点である。例えばキッチンのテーブルの高さなどは殆どの製品で統一されており、これは人間工学的根拠から業界で統一されているためである。一方で、高齢者家具や道具は、研究としてはエビデンスがあるが、実際の製品には反映されていないようである。少なくとも、科学的根拠をもって作っていると講評している製品を大手販売サイトでは見つけることができなかった。

これらの事前調査の結果、品質や構造は、杖や手すりよりも椅子のほうが比較的良好であったことから、調査の対象は生活空間で利用するそれらの家具に限定することとした。

また、これらの事前調査から研究の当初の仮説のように、高齢者家具の普及していない理由に心理的抵抗がある可能性とは別の課題として、そもそも実用にとりうる高齢者用家具が十分に流通していないという問題が予想される。一般的に、高齢となれば買い物に出かけるような活動量も低下して、インターネット等の活用能力も低下する。そもそも高齢者用の良い家具が多く流通していないことと、高齢者自身が心理的抵抗もあり買おうとする動機が弱いことの双方により、結果として普及していないという可能性が予想される。

②研究の経過（研究課題2）

研究課題2について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題2：調査方法の改善と調査計画

実施内容： 高齢者への生活に関するアンケートは、実験協力者を確保することが難しいと予想される。また、実験のやりなおし等も様々な理由で成人に対して実施する場合よりもハードルが高いと予想されるため、事前に予備実験を行いその調査方法を確認した。

アンケートによる調査は、70歳以上の高齢者を実験協力者として、その孫にあたる弊学所属の学生をインタビューアとして実施する。著者と著者ゼミの学生（以後著者ら）が、インタビューアにアンケートの方法や機器の使い方等を事前にレクチャーすることで実施した。そのため、事前準備として、以下を実施した。

1) 高齢者用器具の利用体験を行う。

高齢者家具についての心理的抵抗を検討した先行例が見当たらないため、アンケート項目等を検討するきっかけがない。また、著者らとインタビューアも普段の生活に高齢者用器具や家具を利用していない。そのため、経験的知見がない。そこで、一般的に流通している高齢者用器具や家具を購入して、観察や利用をして著者らおよび（可能なかぎり）インタビューアにこれらの利用経験をつんでもらうようにした。

2) 著者らでアンケート案を用いて模擬的なアンケートを行う。

実際のアンケートでは、調査員（インタビューア）が内容を音読しながら、実験協力者がアンケート用紙を目視しながら、選択をおこなう。この状況を再現して著者らで模擬的な実験を繰り返した。説明が分かりにくい部分、聞き取りにくい言い回しを極力排除して、誤解されにくいように工夫した。

3) 撮影や録音に用いる機器の使い方を練習する。

小型の撮影機器や、録音機器を準備して撮影の練習を行った。なるべく簡単に撮影できるビデオを準備したが、普段撮影になれていない学生は動画の撮影に手間取ってしまう様子がみられた。この理由を学生らに確認したところ、今はスマホ世代であるため、カメラやビデオは特に趣味で利用する人以外はむしろ使わないので、昔より使える人が少ないのではないかと指摘をうけた。後述するが、カメラでの実験の様子撮影は別の理由で実施しなかった（できなかった）。理由は2つ。インタビューアの撮影は弊学の学生であるため同意を得ることが比較的容易であるが、インタビューされる実験協力者である高齢者や生活空間の撮影を学内基準の倫理規定で承諾することにハードルがあった。2つ目が、高齢者が撮影されるということにそもそも心理的負担を予想以上に強く感じる場合があり、円滑なアンケートにならないと考えを改めたためである。また、録音方法について、ボイスレコーダを当初は用いる予定であったが、こちらも同様の理由で使えない学生が多かったため、操作ミスを防止するために、スマートフォンとで録音して、アンケート内容（回答）に間違いがないか確認する方法を用いて。このため、スマートフォンの充電切れを防ぐモバイルバッテリーや、データを取り出すためのメモリを別途準備することとした。

4) 高齢教員を対象にアンケートを模擬的に実施してF Bをもらう。

実際に、調査対象者に対して、試験的に調査を行い、期待する調査が可能であるかを確認する。調査結果をもとに、本格的な調査に向けて、調査対象とする物品やアンケート内容などを調整する。また複数人の高齢者に対して生活環境の物品の調査とアンケートを行うことは様々なイレギュラーが想定されるため、それらに対応できるように、実施計画を綿密に計画した。

特に、調査対象者の普段の生活の負担とならないように、日中に手短に実施できるように計画する必要がある。事前に準備したアンケート内容では30分をこえる時間を必要としたため、

- ・内容をよりシンプルにする改良
- ・説明しやすくする絵でみせる資料の追加
- ・撮影機器の簡略化

を実施した。また、直接的に高齢者の体力や生活実態を聞くことが難しいのではないかとF Bをうけたため、高齢者生活機能評価を用いて、確認する方法とした。これらによって、効率的な本番調査が行えるように準備した。

②研究の経過（研究課題 3）

研究課題 3 について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題 3：本調査：フィールドワーク、エスノグラフィー、アンケートを実施

実施内容： 計画段階では、複数の高齢者の生活実態の調査フィールドワーク、エスノグラフィーとアンケートを行うことを計画していた。対象とする高齢者は都内近辺に住んでいる在学生の祖父母を想定している。そのため、高齢者の生活環境に入り込んでのエスノグラフィー調査は、感染対策の意味も含め、孫にあたる学生に主導してもらい、リラックスした状態で本音を得られるよう調査することを計画していた。一方で、高齢者が自身の生活環境の動画撮影に抵抗をもつこと、およびアンケート単体でも時間が 30 分以上かかってしまうことなどから、双方を高齢者宅で実施することは非現実的であると考えを改めた。そこで、アンケートの内容自体に、生活実態を確認できるような設問を設けることで、高齢者の生活空間に訪問してその場にいる調査員（孫にあたる学生）にも確認してもらいながら両立する方法とした。

②研究の経過（研究課題 4）

研究課題 4 について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題 4：調査結果の分析 まとめ

実施内容： 調査の結果 79 歳～90 歳までの合計 13 人に調査を実施できた。計画段階でも n=10 組程度が限界であると想定していたため、予想の範囲ないである。当初の想定どおり、この結果を量的研究としてのみ統計的に処理しても、その背景にある高齢者特有に動向やニーズを把握することは難しい。そこで、ここでは調査でえられた成人健常者とは異なるニーズや特徴について、今後の質的研究のための事例として、高齢者が福祉・介護用品や家具の導入する際に心理的抵抗とを感じる内容について仮説を立てた。今後の著者らや関連研究者の参考となれば幸いである。結果の分析は当初の予定とおり論文で発表を考えている。自著盗用を避けるために、本報告書では特に特徴的であった事例を簡潔に報告する。

高齢者宅にある家具は、当該高齢者が昔から利用しているものか、子や孫が買ったものであった。そのため、高齢者は家具を買おうとも思っていないし、実際に買っていない。また、子が高齢の親（当該実験協力者ら）に対して家具を買う際、そもそも高齢者用家具を知らないがために検討していない可能性がある。

高齢者生活機能評価の結果に関係せず、基本的に自身の身体能力を高く評価しており、そのため身体能力に合わせた家具や用具の買い替えの必要をそもそも意識していない。つまり高齢者用家具を探す行為をしていない。このことから高齢者用家具の意匠に心理的抵抗を感じるために購入にすすまないのではなく、自身は高齢ではないと考えたいという願望から、そもそも高齢者用という概念に必要性を感じないようにするという心理的反応（抵抗）があるために、購入していないと考えられる。一方で当初の想定どおり、高齢者家具の購入に対して意匠性に対してネガティブな結果は得られた。実際に高齢者用家具と一般家具の写真を複数混在させて、購入希望順を確認したところ、本人の高齢者生活機能評価の結果に関係なく、高齢者用家具の順位は低いものとなった。つまり、高齢者用家具自体が一般家具よりも、購入にネガティブという事実があった。これらの調査結果（概要）から考えられることは、今後高齢者の自立を支援する高齢者用家具を普及させるためには、高齢者がより若い時代の際に購入して継続して利用できるような成人～高齢者の双方が無理なく利用できる家具の提供や、高齢者自身と高齢者の子供双方が購入にネガティブとならない意匠の高齢者家具等が有効と予想される。

③成果・期待される波及効果等

研究を実施して得られた成果および期待できる波及効果について記述してください。

本研究の動機として仮説していた家具への抵抗感に関する調査成果とその調査に付随するいくつかの成果を得た。実際の 13 人の高齢者の自宅の調査において誰 1 人高齢者用家具や器具を利用していなかったこと、および購入を検討もしていなかった。そのため高齢者用家具や器具が普及していないという著者の経験的な知見が実際に確認できた。実験協力者の高齢者が家具の買い替えを行わない理由として、家具自体への心理的抵抗よりも、高齢者用品の必要性を感じていないという結果を得た。これは、本人の生活能力に比例して変化するものではなかった。

今後さらなる高齢化が進む日本において、自宅での高齢者の健康的な生活（健康寿命の延長）は大きな課題である。これらの成果から、高齢者用家具や用具の普及の方法の検討が進められると考えられる。例えば、高齢者がより健康に安全に生活するための高齢者用家具は、一般的な家具のように消費者の意欲による購入を待つような受動的な方法ではなく、価値を実感してもらう能動的な販売方法や、そもそも販売ではない別の方法で生活空間に普及させていく必要が考えられる。

④成果物

本研究について発表した論文、刊行物、シンポジウム等の情報を記載してください。

参照 URL がある場合はそれを含めてください。

現在投稿論文執筆中で、本報告時には刊行されていない。本報告内容をより詳しくした内容を、人間工学会の論文誌である人間工学に投稿準備中である。

⑤写真

研究実施中の様子、成果物等の写真を掲載してください。（各写真にキャプションを付けてください。）

調査のためにインタビューに対応して下さった高齢者宅の家具の撮影は行っておりますが、プライベートな空間でのインタビューであり、調査を目的にしており、報告資料での写真の公開の承認を得ておりません。実験の負担軽減のために実施しておりません。掲載することができないことをご了承ください。